

ロマンス語学関係文献(3)

前号の訂正・補遺

前号に間に合わなかったが、ルーマニア・アカデミーの Al. Rosetti 教授に問い合わせた最新の情報が入手できたので、以下に訂正・補遺を記させていただきます。

1. 17. STUDII ŞI CERCETĂRI LINGVISTICE.

年6回に増刷されるようになったのは1964年以後。Cazacuが副編集長になったのは1960年。

1. 18. REVUE ROUMAINE DE LINGUISTIQUE.

創刊後2年(1956-1957)は年1回。以後年2回、1964年から年6回(承前)。Jordanが編集代表だったのは1963年までで、翌年から Al. Rosetti が編集長、B. Cazacu が副編集長として就任した。

1. 19. REVISTA DE FILOLOGIE ROMANICĂ ŞI GERMANICĂ.

不幸にしてこの定期刊行物は、編集代表の Tudor Vianu が物故した年(1963)までで廃刊になった。創刊の1957年は年1回だけ。

1. 20. CERCETĂRI DE LINGVISTICĂ.

年2回刊行になったのは1961年でなく、1960年から。編集代表は、創刊の年(1956)が Şt. Paşca, 次の2年(1957-1958)が編集長 D. Macrea, 副編集長 E. Petrovici, 1959年以降が(既報のように) Petrovici が編集長で、Macrea が副編集長。

1. 21. LIMBA ROMÂNĂ.

創刊の年(1952)だけ年1回の刊行で、1953年からは年6回。編集主任は創刊から1958年なかばまで D. Macrea, それ以後(既報のように) Iordan-Coteanu の組み合わせとなった。

Rosetti 教授は以上のほか、他の代表的定期刊行物として、彼が所長をしておられる音声・方言研究センター(Centrul de cercetări fonetice și dialectale)の発行する FONETICĂ ŞI DIALECTOLOGIE を挙げておられるが、これは創刊が1958年で、以下1960年から1963年まで年1回、その後しばらく中断して今年第6号が出るというような不定期な状態なので、ここでは詳しく扱わないことにする。

ついでながら、この項や前号の項でしばしば名前が出た、Cluj市の言語学界の中心人物 Emil Petrovici 教授は、つい最近汽車の事故で亡くなられたという。同教授はルーマニア言語地図の編集者として、また独特のルーマニア語音韻論の提唱者として、国際

的にもよく知られた学者であった。ここにつつしんで哀悼の意を表させていただきます。

(東京教育大学助教授 田中 春美)

大会記録(1968年)

本会が発足して2年めの1968年だが、その設立1周年を記念すべき春季大会は、準備が遅れるなど諸種の事情で開催されず、秋季大会を東京でひらくことによって春・秋2回の大会にかえることとした。すなわち：

10月13日(日), 1~5 p.m.

東京外国語大学 1214教室

というのが当初の計画で、そのために東外大の会員教官のかたがたも熱心に尽力して準備をすすめてくださり、案内状も発送された。ところが、大会のおよそ2日前になって、その東外大が学生によって封鎖されるという緊急事態が生じ、やむなく会場を他に移さなければならなかった。幸い、早稲田大学と交渉して、同大学19号館・小野記念講堂に会場をもうけることができた。

この突如の事態に、準備にあっていた幹事諸氏は大いにあわてさせられたが、それ以上に、東外大のかたがたには非常なお世話をかけることになった。当日、あいにくの雨のなかを、東外大の会員のかたがたは封鎖された正門の前に立って、事情を知らずに来られたかたがたにいちいち説明して早大への案内をはたして下さった。

また大会案内を掲載するように頼んであった朝日、毎日、読売の各新聞のうち、朝日だけは会場変更の通知がまにあつた。岸本通夫・大阪大学教授や近松洋男教授以下の京都外国語大学のかたがたは、まっさきに会場にかけつけて準備を手伝って下さった。

こうして主催者・来会者ともに、思わぬ苦勞をした上、およそ1時間ほど開会時刻を遅らさなければならなかったが、ともかくも本会の1968年秋季大会を開催することができた。来会者約50人。なかには、悪天候のなかを東外大からかけつけ、長時間、冷えびえとした講堂で熱心に研究発表に耳を傾けておられる永田寛定先生のお姿も拝見された。日程は、ほぼ、すでに案内されていたとおりの下記の順序にしたがって進められ、終始、三宅徳嘉・東京都立大学教授に司会の勞をお願いすることとなった。

1. 研究発表

- ・イタリアにおける国語学 菅田 茂昭 (早大)
 - ・XVI世紀ポルトガル語の発音について 池上 夫 (東外大)
 - ・La formación del castellano en el poema del Cid
Antonio Cabezas (京外大)
 - ・angl. relic, fr. survivanceという一つの概念 岸本 通夫 (阪大)
- ### 2. 第12回国際ロマンス語学会の報告
- 新村 猛 (名大)